

## 「経歴書」にみる鈴木經勲

中村 茂生

近代日本の人びとの間には、太平洋諸島から東南アジア方面への志向性があり、それが実際の活動に結び付く場合もしばしばあった。これまで、歴史学や政治学で「南進論」として扱われてきたこの問題の検討は、日本近代を対象とする人類学を想定するならば、やはり看過できない重要な課題である。人類学にとってひとつ関心の対象となるのは、おそらく、近代において人びとはいかに「日本人」としてのアイデンティティを構成してきたのか、そしてその過程でどのように他者を表象し、自画像を描いてきたのかという問題である。その考察のためにはまず、他者としての西欧、さらに非西欧地域の人びとの遭遇の様相を知らなければならぬ。太平洋諸島でのいわゆる「南洋土人」の発見も、そのなかの重要なトピックのひとつである。そして、明治以後もっとも早い時期での貴重な太平洋諸島渡航の記

録として評価されてきたのが鈴木經勲の残した資料である。鈴木は、数度にわたって太平洋諸島へ渡航し、『南洋探検実記』（一八九二年）、『南島巡航記』（一八九三年）、『南洋風物誌』（一八九三年）の三冊の著作と多くの新聞雑誌記事を残した。<sup>①</sup>「南進」論をはじめ問題化した矢野暢は、鈴木を志賀重昂、田口卯吉、竹越与三郎らと並ぶ明治期の代表的「南進」論者に数えている。矢野は、「南進論」者たちの歴史的役割を、①「南洋」という地理的概念を成立させた、②日本の国策としての「南進」政策に多少とも理論的影響を与えた、③日本国民の南洋熱を盛り上げるためアジテーター的役割を果たした、④自ら南洋に赴き探検その他に従事して、いわば南方関与の先駆者ないし殉教者というイメージをまとい、後の時代に政治的シンボルとして祭り上げられた、の四つに分け、鈴木を②と④に分類して

いる。<sup>②</sup> 鈴木最初の南洋行は、一八八四年、マーシャル諸島に漂着した日本人が現地人に殺害されたという事件を調査する目的で、当時の政府によって派遣された時だとされている。この時鈴木は、殺害者の特定に成功し、さらにマーシャル領有を主張して当地に日本国旗を掲揚したという。鈴木<sup>③</sup>の論理では、マーシャルは、未だどの列強諸国にも属さない「無主地」であり、これを機会に日本に編入すべきであった。ところがこれが、帰国後、条約改正前に列強との余計な軋轢をおそれる外務卿井上馨の不興をかい、鈴木は翌年国旗回収のために再びマーシャルを訪れたことになっている。矢野が②に鈴木を分類したのは、鈴木<sup>④</sup>の再三にわたる無人島占領建議や、この最初の航海とその顛末などを考慮してのことであろう。④に関しては、太平洋戦争開戦後に主要著作が相継いで復刊されたこと、『太平洋探検家鈴木經勲』（一九四二年竹下源之助 大日本海洋図書出版）と題する伝記が出版されたことを指してのことと思われる。矢野が③に分類しているのは、当時のベストセラーであった『南国記』（一九一〇年二西社）の著者である竹越与三郎のみであるが、鈴木<sup>⑤</sup>の著作も日本国民に対して一定の影響力はあったようである。実際、一九一四年に第一次世界大戦の結果ドイツ領ミクロネシアが実質的に日本領となるにともなって渡航者が増え、かれらによる新占領地

の見聞記や調査記録がまとまって出版されるようになると、そこで鈴木<sup>⑥</sup>の著作はしばしば参照文献として挙げられることになる。ここからある程度人びとの間に浸透していたことがわかる。「南進」論者鈴木經勲の役どころをまとめれば、まず、マーシャル、グアム、ハワイなど太平洋諸島への実際の航海が経験としてあり、その報告を新聞雑誌記事、単行本などで次々発表すること、官民間わず日本人に今後進出するのに有望な地域としての南洋のイメージを提供した、ということになるだろう。鈴木經勲とその冒険的航海への関心は戦後も引き継がれ、『南洋探検実記』は二度復刊され、外交文書中に最初のマーシャル行の復命書が発見された時も話題となった。<sup>⑦</sup>

ところが、ミクロネシア考古学の高山純の研究によって、鈴木經勲評価の再考が促されることになった。<sup>⑧</sup> 高山がおもに問題にするのは、鈴木<sup>⑨</sup>の最初のマーシャル行である。高山は、鈴木<sup>⑩</sup>の代表的著作から、あまり知られることのなかった新聞雑誌記事までを詳細に検討し、それぞれの記述に航海の日程をはじめとして多くの矛盾点があることを指摘する。さらに、『南洋探検実記』の記事でこれまで評価の高かった民族誌的記述の多くが、実際にはマーシャルでは見られないものであるとし、最終的に鈴木<sup>⑪</sup>の最初のマーシャル行は虚偽であり、『南洋探検実記』はアメリカで出版さ

「経歴書」にみる鈴木經勲（中村）

れた漂流記の剽窃ではないかと示唆している。高山の議論は膨大な資料に支えられており、マーシャル行がなかったとするのは速断だとしても、部分的には十分説得力をもつ。最初のマーシャル行に限らず、鈴木の本冒険的航海が伝えられる通りにおこなわれたわけではなく、記述のすべてが、必ずしも本人の体験に基づくものではない可能性は高いと思われる。これまで繰り返し引用、言及されてきた航海や著作であるが、その真偽について問われることはなかった。

しかし今後は少なくとも著作をそのまま民族誌として評価することはできないであろうし、探検家あるいは冒険家としての鈴木經勲像も見直す必要がある。ただし、「南進論」者としての鈴木の評価は、微妙なニュアンスは変化するとしても、根本的には修正される必要はない。矢野が言う「南進論」者の歴史的役割という観点からすれば、あくまでも当時実録として発表された記事や著作の存在こそが重要なのである。マーシャル行の真偽にかかわらず、鈴木が当時の日本人に与えた影響に変わりはない。むしろ考えなければならぬのは、太平洋戦争期に確立された鈴木經勲像が、戦後も無批判に踏襲されてしまったことである。もっとも高山はマーシャル行を捏造と断定し、鈴木の人間性にまで及んだ批判を展開するが、ここは川村湊も言うように、「現在の知識や教養、学問的水準で鈴木經勲を裁きすぎて

いる」<sup>(3)</sup> くらいがある。

鈴木經勲は、実際にマーシャル諸島を訪れたのか否か。『南洋探検実記』の記事が疑わしいとしても、こちらには再考の余地があると思われる。すでに高山説に対する反論もいくつか発表されている<sup>(3)</sup>。仮に渡航していないとしても、前述の通り「南進論」者鈴木の本歴的役割に変わらなかった明治期「南進論」の代表的著作が、まったく事実に基づかない一種の創作であり、それが日本の「南進論」に強い影響を与えてきたとしたら、それはそれで興味深いが、できうるならば実際の経緯が明らかになり、鈴木經勲という人物の実像も把握されることが望ましい。そこで本稿では、「経歴書」と題されるこれまで知られていなかったひとつの資料に従って鈴木の本蹟を整理し直し、新たな鈴木經勲像の呈示につなげたい。これは鈴木自身が経歴を記した文書であり、高山の出した疑問点に関連する記述や、知られていなかった鈴木の本航海に関する情報を含んでいる。例えばここには最初のマーシャル行についての記述はあるが、日章旗をめぐる二度目への言及はない。また、生年をはじめ、最初のマーシャル行以前と明治二十年代中期に関しては、従来信じられてきたものとは若干異なる経歴が記されていて興味深い。

鈴木の本主要な伝記資料は、先に挙げた三冊の著作と最晩

年の「南洋翁回顧談」<sup>⑦</sup>、竹下による『太平洋探検家鈴木經勲』であるが、いずれも一般向けに書かれ、あるいは話されたものである。これに対し「経歴書」は、公表を前提に書かれたものではなく、あくまでも事務的な書類といえる。この点で「経歴書」は、これまでの伝記資料とは根本的に性格が異なっている。もちろんこれが最終的な資料であり、ここに記されている事実がまったく脚色を含まず、すべての疑問点が明らかにされていると言っているわけではない。内容の信憑性の徹底的検討はまた別に行うとして、ひとまずここでは主眼をこの新しい資料の紹介におくこととする。

この文書は、防衛研究所図書館に「日独戦書T三―三七四九四大正戦役 戦時書類三十七」として保管されている文書録中にある。一九一四年八月、第一次世界大戦でドイツに宣戦布告した日本は、約半年後には赤道以北のドイツ領ミクロネシアを占領したが、その新占領地への渡航を希望する人びとから海軍宛に許可を求めて提出された申請書類をまとめたのがこの文書録である。鈴木関連の書類は、海軍側から寄せられた原則的に渡航を許可する旨の鈴木宛の回答書、鈴木から海軍大臣宛の渡航申請書、「経歴書」の順に綴じられている。申請の日付は大正二年（一九一三年）十二月二十一日、許可を受ければ年内にも出航すると記されている。ただし鈴木がこの時実際に渡航した記録は

史苑（第五七卷二号）

残っていない。大正二年というのは明らかな間違いである。提出書類には、海軍側の受領印が押されているが、そこでは同じ日付で大正三年となっている。「経歴書」は、一五ページから成り、表紙に鈴木自身の名刺と「鈴木事故ノ節ハ本人ヲ以テ代理致サセ度」と記された松長信氏の名刺の二枚が付せられている。松長信氏は旧幕臣の子弟で、鈴木と同じ聖堂学問所の出身者であり、その一種の同窓会組織であった「昌平旧友会」を通じ鈴木とは明治維新後も交流があったらしい。<sup>⑧</sup>

以下「経歴書」全文を再録し、最後に若干の解説を加える。

#### 経歴書

#### 履歴

東京市下谷区北稲荷十六町番地

士族 鈴木經勲

安政二年十二月十二日生

安政六年二月就学

慶応元年十一月聖堂学問所に於て素読吟味に及第甲科褒賞受領

慶応二年正月より同三年十二月末日迄仏蘭西語学伝習御用を拝命横浜弁天語学所に於て仏人ビュラン氏、プーセイ氏

「経歴書」にみる鈴木経勲（中村）

に就き仏語を伝習す

慶応四年一月江戸西丸下伝習隊附鼓手拝命従軍

明治二年七月より同七年四月迄沼津に於て教授方田邊太一氏同赤松代三郎氏（則良閣下事）に就き普通学科を研習す  
明治七年七月より同十年中駿州駿東郡羔洋学校教授掛勤務  
明治十一年三月より十九年三月迄外務省御用掛を奉職  
右年間勤務は左之通

一 翻訳生見習

一 記録局横文編輯掛

一 条約改正取調掛兼務

一 外務省使用電音符号編纂掛兼務

輯掛兼務

明治十七年より航海に従事す

第一航

御用掛鈴木経勲

御用掛後藤猛太郎濠斯太刺利亞地方へ被差遣候に付随行申付候事

明治十七年七月二十八日

外務省

右の通り拝命是はマルシャル群島土人本邦の漂流六名を屠殺したる事件取調の爲め明治十七年九月一日英国鯨漁船スクーネル形エーダ号に塔し横浜を投錨しマルシャル群島三十二島を巡航し内訓の条目に従い悉皆取調を了し明治

十八年一月末帰朝復命す

第二航

マルシャル群島実践以降初て南洋諸島の豊穠なると旦つ其位置が我邦枢要の区域に位するを以て等間に附すべきものに非るを思ひ\*に初て殖民するの計画を起し明治十九年中再航を企て翌明治二十年三月に到り其機に到着せしを以て爲めに職を辞し同年四月五日殖民地及び占領すべき島嶼取調の爲め米国船スクーネル形アテラン号に塔しマルカス、よりフレチフリケット、に至る九島を経てマルシャル群島及びクリスマス、ポネピ、パラオ、ヤップ、グワム、島を視察し同年九月廿日帰朝

第三航

明治二十年十一月一日ボルカノ諸島探検の爲め高崎東京府知事に随ひ明治丸に塔し横浜を投錨豆南諸島、小笠原島、ボルカノ諸島に航し同月廿八日帰京

第四航

明治廿一年五月十五日東京日本橋区本小田原町十七番地魚問屋斎藤林造同町十八番地同業色川惣吉等と共に鱈、及物産採収之目的を以てスクーネル形太陽丸に塔しカロリン諸島を指して出発せしが小笠原島附近に於て颱風の爲め帆を破り順走して同月二十二日豆州下田へ着航す  
同年六月船の修繕を終り十日に下田を出帆せしにスミッス

附近に於て又た大風雨に襲われ船具に破損夥く紀州熊野沖へ漂流す依て志州的矢港に入港直ちに修繕に着手

同年六月三十日又々の矢港を投錨したるにマリヤナ附近に於て又た亦た台風に遭遇今回は船体に破損を生じ遂に漂流して岩城の小名浜に漂着す此航や三次とも志を得ず遺憾に堪へず遂に再航を企図する事に決し同年十一月廿一日を以て空しく帰京す

#### 第五航

明治廿二年八月十四日海軍練習御軍艦金剛に便乗の御許可を得南洋諸島国に於ける商況其他探検の目的を以てハイ、ハンニグ、サモア、ヒージー、グアム、島に航し廿三年二月廿二日帰朝

#### 第六航

明治二十三年五月十四日商業及向來の殖民事業取調の爲めスクーネル形天祐丸に搭し横浜を投錨しグワム、ヤップ、パラオ、ポネベ、の四島に航し同年十二月六日帰朝

#### 第七航

明治二十四年一月廿五日米松スクーネル形ターヤー号に搭し物産、商況特にパナマ開鑿事業の如何取調の目的を以て東洋諸島、ホノルルを経てサリナクローズ、サンジョーゼ、コリント、パナマ等に航し二十五年四月帰朝

#### 第八航

史苑（第五七卷二号）

明治二十六年三月九日横浜出帆のゲーニックス号に塔し廿二日桑港に着同月廿九日シカゴ府に於る博覧会を視察し八月三十一日桑港発チャイナ号に塔し九月五日ホノルルに着船同日午後五時ホノルル出帆九月十六日横浜に着す

明治廿七年六月四日渡韓同日より大島混成旅団に九月十八日より第五師団司令部に二十八年一月十五日より第三師団司令部に従軍し朝鮮国牙山の初戦より満州田庄台の終戦迄新聞記者兼写真技手として従軍し五月廿五日第三師団司令部に從て凱旋す

明治三十年以降老母の病床に在るを以て遠洋航海を中止し日本赤十字社愛知県支部の属托を受け社業拡張に従事し傍ら東京火災保險会社名古屋支店に勤務す

大正二年六月より東洋生命保險会社に勤務し東京火災保險会社を辞す

右 右畧歴如斯候也

右

下谷区兵事会評議

下谷区衛生会幹事

東洋生命保險会社外事監督

鈴木経勲 印

前記経歴之通り多年数次之航海を遂行致し夫れに依て得たる結果としては諸島に向て移民するの手掛及物産の採収事業等畧ば其緒を開き殊に明治二十三年第六航海之際はマリ

「経歴書」にみる鈴木經勲（中村）

ヤナに開拓地を借区致す件に付き同島知事リウトナンコロネール、ジョワキン、バラ、レイ、イ、ルビヨ氏之同意を得て同庁会計官アドミニストラデール、デ、パシャンダ、マヌエル、アリーヌ、スカラ、氏の指導にてテプガンに其土地をトする等\*て計画を相整へたる事有之候然るに當時の国是としては我政府は之等の事に封し容易に認許を付与する能はざる旨を以て説諭的命令之下に中止を余儀なくするに到れり右多年航海之目的希望の存する所と時運未だ到らざりしが為めに好結果を見るに到らざりし事情と御参考迄に\*に畧言仕候也

（漢字かな遣いは現代のものに改めた。また判読不可能な文字は\*印で示した。）

ここからは、「経歴書」の記述のなかで、まったく知られていなかった、あるいはこれまで知られていたものと異なる経歴と航海について整理しながら述べることにする。尚、森久男によってまとめられた鈴木經勲の略年譜及び略歴（以下両資料を指して「略年譜」と記述する）をおもに対照資料とする<sup>⑩</sup>。

第一航海まで

先に触れたとおり、一八五三年（嘉永六）とされてきた生年が、ここでは一八五五年（安政二年）になっている。

この点をはじめ、一八八四年（明治一七年）の最初のマールシャル渡航まで、「経歴書」と「略年譜」の記述には、微妙な食い違いがある。まず「略年譜」では、一八六八年（明治元年）に彰義隊の鼓手となったとあるが、「経歴書」では伝習隊となっている。伝習隊ならば、大鳥圭介に率いられて会津方面から函館まで転戦した可能性が出てくる。また外務省御用掛に登用された年が「経歴書」では一年早くなっているし、それまでの約三年間、羔羊学校教授掛勤務となっている期間中の一八七六年には、ラッコ密漁船に乗り込み千島方面を航海していたというのがこれまで知られてきた経歴であった。羔羊学校については、経勲の兄が設立したキリスト教系の小学校であったといわれているが、『静岡県教育史』（一九七二年静岡県立教育研修所編）には該当する私立学校は記載されていない。よく知られているように、静岡では旧幕臣を中心にキリスト教が盛んで、一八七四年（明治七年）には、静岡バンドと呼ばれるグループが活動をはじめていた<sup>⑪</sup>。経勲の兄はキリスト教徒であったというが、兄弟によるキリスト教系学校経営も、これらの動きと無縁ではなかったのではないか。

しかしこの時期でもっとも興味深いのは、一八六九年（明治二年）の項に見られる、田邊太一、赤松大三郎の名前である。ここから、鈴木が沼津兵学校の学生もしくは研

修生であったことがわかる。沼津兵学校は、静岡に移封された徳川家が、<sup>12)</sup>「旧臣授産と西洋文明の活用」を目的に設立したといわれる。鈴木がフランス語を学んだ横浜の語学所が、ここの母体のひとつになったともいう。一八六八年から一八七二年（明治五年）までの約三年半という短期間に、結果的には新政府に流れることになるものの、ここから多くの人材が育っている。明治四年に廃藩置県が実施され、再び徳川家が江戸にもどったことなどから短命ではあったが、組織や教育内容からみてそれまでになかった近代的な教育施設として評価は高い。学課には、外国語（英、仏から選択）、万国地理、幾何、実地測量などが含まれ、教授陣も頭取の西周以下、幕末に西洋の学問を修めた優秀な人材が揃っていた。山口昌男は、日本近代を「敗者」の視点から捉えた著作の中で沼津兵学校を扱い、「巨大な学術文化の貯蔵庫<sup>14)</sup>」であったと表現している。兵学校の設立と運営を、薩長政権に対する文化的レジスタンス運動と捉えるむきもある<sup>15)</sup>。

田邊、赤松は、ともに一八七〇年（明治三年）までこの沼津兵学校の教授であった。後に岩倉使節団にも加わることになる田邊は、幕末期から外交に携わってきた人物で、兵学校を辞するのも、新政府からの外務省出仕命令による。赤松は咸臨丸で渡米した日本人のひとりで、オランダ留学

の経験もあり、兵学校の設立から参画している。田邊同様新政府の命により、兵学校から海軍に移った。

鈴木の記述は、明治二年からおおよそ五年にわたって両者から教育を受けたと思わせるものになっているが、実際には一年前後であったはずである。また、普通学科を研習、とあることから、兵学校の正規の学生ではなく、研修生として在籍した可能性が高いと思われる。それでも一八七二年以後は沼津兵学校は存在しないから、一八七四年（明治七年）までの二年間は何を意味するのかわからない。兵学校付属小学校が集成舎と名を変えて存続しているので、こちらと関係があった可能性もある。とくにふたりの名前をあげている理由は不明であるが、田邊が外務省に出仕したことは、あるいは後に鈴木が外務省に職を得ることと関連があるのかもしれない。一八七〇年（明治三年）には、第五期生として田口卯吉（安政二年生）が兵学校に入学している。田口は言うまでもなく、一八九〇年（明治二三年）南島商會を興し、鈴木とともにミクロネシア各地を巡航した人物である。沼津で作られた人脈が、意外に後々まで生きていたのかもしれない。

第一航海までの記述で確認できるのは、明治維新を経た旧幕臣の子弟の典型的な境遇である。ここから、明治期「南進」論の特徴とされる反官、反中央的側面への結び付



「経歴書」にみる鈴木経勲（中村）

きはごく自然であったと思われる。鈴木木の太平洋諸島への執着を、山口昌男が言う「敗者」特有の、オルタナティヴ追求の現れと考えることもできるだろう。鈴木もまた、まぎれもなく「敗者」として近代日本に臨んだ人間であった。第一航から第八航、その後

さて、高山によって虚偽とされた最初のマーシャル行であるが、「経歴書」には、第一航として『南洋探検実記』通りの内容が記されている。ここにはとくに新しい情報はない。日章旗掲揚にまつわるマーシャル再渡航にはまったく触れていない。第二航は、これまで、外務省を辞した後井上馨から与えられた忠信丸というスクーナー船でおこなった航海とされてきたものにあたる。『南洋風物誌』はこのときの記録を含んでいると考えられてきたが、実際には忠信丸の存在自体不確かであった。「経歴書」では、これがアメリカのスクーナー船アテラン号に乗船しての約五か月に及ぶ航海となっている。

第三航は、高崎五六東京府知事のほか、横尾東作、服部徹、依岡省三といった錚々たる「南進」論者が加わっていた。当時の横浜港出入港記録によると、明治丸は一〇月三十一日にクルーズ目的で出港、十一月十七日に九州から帰港したことになる。微妙に日付が異なる。

第四航は一八八八年（明治二十一年）五月から十一月に

かけて試みられている。「略年譜」では、この年所有船忠信丸が難破し、その後、後藤象二郎の大同団結運動に参加したとなっている。ここでも太陽丸というこれまで知られていなかった船名が記され、同行者二名の住所氏名まで明記されている。

第五、六航は、鈴木が残したものの以外にも資料があり、それらの記述とそれほど大きな相違はみえない。「略年譜」とは、第五航海での軍艦金剛の出港日と第六航海での天祐丸の帰港日に数日の誤差があるばかりである。

第七、八航については、「略年譜」にはまったく記述がない。一八九一年（明治二十四年）には、フィリピン、マリアナ諸島への渡航を計画したが失敗したのではないかと森は推測している。また一八九三年の五月には上野で遠征会、武術大演習を挙行したはずであるが、「経歴書」に従えば、この時期鈴木はアメリカ滞在中であった。第七航のパナマ開墾事業とは、当時一八八九年以来計画が中断していたパナマ運河の工事を指すと思われる。第八航の「シカゴ府ニ於ル博覧会」とは、「民族学的集落」の展示などで知られ、帝国主義と人種差別主義で特徴づけられるシカゴ万博のことであろう。鈴木はここで、自らが深く関わってきた太平洋諸島人が、「展示」されている様に遭遇しているはずである。第八航で渡米の際に乗船したことになっているゲー

ニック号は、三月九日付で横浜港からサンフランシスコに向けて出港した記録が残っている。<sup>20</sup>一方帰国時のチャイナ号の方は、当時横浜サンフランシスコ間に就航してはいたが、「経歴書」の記述にある九月一六日に入港した記録はない。ところで、一八九二年から翌九三年にかけては、『南洋探検実記』にはじまる三つの著作が刊行された時期である。「経歴書」と重ね合わせれば、第七航後三か月で『南洋探検実記』が出版され、『南島巡航記』『南洋風物誌』は第八航の途中で鈴木本人が日本を離れている間に出版されたことになる。『南洋風物誌』には鈴木の前序がなく、全体にやや統一感を欠く構成になっていることは、著者自身が出版に立ち合えなかった事実を反映しているのではないだろうか。三冊ほぼ同時期の出版は、あるいは第八航の費用をつくるための方策であったのかもしれない。

従来、探検家あるいは冒険家としての鈴木経勲が強調されてきたきらいがあるが、第七、八航の内容をみると、事業家的側面に改めて注目せざるを得ない。

第八航以後、鈴木に従軍記者としての経歴がはじまる。『経歴書』と『略年譜』ではかなり内容が異なるが、ここでは詳しい検討はおこなわない。

鈴木自身で八つに整理した航海について、日付や船名、

立ち寄った島じまの名前は詳細に記されている。これらは今後鈴木を経歴を明らかにしていく上で、重要な手がかりになるだろう。また、出入港名が横浜の場合に限って記載されているが、当時横浜で発行されていた週刊の新聞「ジャパンウィークリーメール」の記録と照合した結果は、文中で触れたとおりほぼ一致していた。これによって「経歴書」の内容はまったく根拠のないものではなく、少なくとも検討に価する記録であると言ってよいだろう。そう考えると、これまで鈴木の伝記資料として利用されてきたもののうち、昭和に入ってから出た「南洋翁回顧談」と『南海の大探検家鈴木経勲』の記述が著しく突出し、脚色の度合が大きいように見えてくる。一例をあげれば、戊辰戦争期の経歴の中で、「伝習隊鼓手」が「彰義隊鼓手」へと変わっている。またマージナル諸島に日章旗を回収に行ったという逸話も、この段階ではじめて詳細に語られる。この話しに関連して、「経歴書」の最後に興味深い記述がある。一八九〇年（明治二三年）の第六航において、マリアナに開拓地を租借することで当時のスペイン政庁の役人と合意に達していたが、当時の日本政府の許可がおりず実現しなかったというものである。「経歴書」を見る限り、鈴木は太平洋諸島進出が調査、探検の域を出て、実際の事業ないし植民に結び付くのはこの一件をおいてほかにない。これが「経歴書」執筆

「経歴書」にみる鈴木經勲（中村）

当時、すでに二〇年以上経過しているにもかかわらず、鈴木  
木の印象に強く残っていることが、文面から窺われる。こ  
れらのことから、マリーシャルへの日章旗回収のための航海  
は、この一件の寓話として語られた物語であると解釈する  
ことは許されないだろうか。「経歴書」に「時運未だ到ら  
ざりしが為に好結果を見る」ことができなかったと記す鈴  
木にとって、晩年、実際のな「南進」論者たちが容易に海  
を越えて活躍する時代まで生き存えた時、このような寓話  
や所有船による探検談を残すことによってせめて先駆者と  
しての自画像を残そうとしたのではないだろうか。

以上、これまで知られていなかった鈴木經勲の「経歴書」  
を紹介し、解説を試みた。内容の真偽を逐一検討すること  
はしなかったが、高山がきっかけをつくった鈴木經勲再評  
価の流れにひとつの材料を提供できたのではないかと思う。  
今後の鈴木經勲研究、ひいてはこれが多少なりとも「南進」  
論研究全体に役立つ資料提供となれば幸いである。

註

本稿の作成にあたっては、ミクロネシア協会の山口洋児氏から  
多大なご協力をいただきました。雑誌記事など、ほかでは容易に  
入手できない資料を参照することができたこと、また「経歴書」  
の解釈にあたっての貴重なご助言に感謝いたします。

- (1) 『南洋探検実記』（一八九五年東京博文館、一九四二年南方  
情勢社、一九四三年日本講演協会、一九六二年平凡社、一九  
六五年創造書房）、『南島巡航記』（井上彦三郎との共著一八  
九三年経済雑誌社、一九三三年拓務省、一九三六年南洋興発  
株式会社、一九四二年大和書院、一九八三年太平洋学会）、  
『南洋風物誌』（一八九三年書肆八尾新助、一九四四年日本講  
演協会）。尚、『南洋風物誌』の書肆八尾新助版は原本が確認  
されていない。書籍ではないが、一八九三年から翌年にか  
けて、『冒険探奇南洋風物誌』と題し、大日本教育新聞の付録  
として出版されている。以上は、山口洋児「ミクロネシア資  
料文献解題その一」（一九九四年『ミクロネシア』通巻八九  
号日本ミクロネシア協会）によった。
- (2) 矢野 暢『「南進」の系譜』一九七五年中央公論社五〇一  
五一ページ
- (3) 『毎日グラフ一九八四年二／十二日号』三七 (6) 通巻一七  
九二号 九〇―九五ページ
- (4) 高山 純『南海の大探検家 鈴木經勲―その虚像と実像』  
一九九五年三一書房
- (5) 川村 湊『「大東亜民俗学」の虚実』一九九六年講談社  
一四六ページ
- (6) 山口洋児「ミクロネシア資料文献解題」（一九九五年『ミ  
クロネシア』通巻九四号日本ミクロネシア協会三八―四〇ペー  
ジ）、中島 洋「南海の大探検家鈴木經勲その虚像と実像に  
ついて」（『太平洋学会誌』第六六―六七号一九九五年太平洋  
学会四一―四六ページ）山口は、東京帝室博物館の所蔵品目  
録中に鈴木らがマリーシャルから持ち返った物品が記載されて  
いることを、中島は高山が虚偽の資料としている最初のマー

シヤル航の「復名書」(外交資料館蔵)の再検証をおこなった結果を、それぞれ根拠としている。

- (7) 「南洋翁回顧談(1)~(9)」(一九三七—一九三八年『明治大正史談』四—二輯 明治大正史談会)。明治大正史談会は、尾佐竹猛らを世話人とし、明治を日本がもっとも有意義な発展を遂げた時代として研究対象とした。

- (8) 高山も指摘する通り、鈴木木経の記述には年号や日付に関する矛盾が少なくない。この場合、あえて大正三年を二年に間違えた理由を想像すると、鈴木が明治から大正への改元を理解せず、一九一三年を大正元年としていた可能性に思い当たる。

- (9) 「南洋翁回顧録(八)」(一九三八年『明治大正史談』一一輯八ページ)

- (10) 森 久男「鈴木経勲略年譜」、「解説」(一九六二年『南洋探検実記』平凡社二四八—二八六ページ) 森はこの年譜と略歴を、「南洋翁回顧談」と竹下著『太平洋探検家鈴木経勲』(一九四三年大日本海洋図書出版社)に依拠して書いていると思われる。

- (11) 太田愛人『明治キリスト教の流れ域 静岡バンドと幕臣たち』(一九七九年築地書館 一九九二年中央公論社より再刊)

- (12) 大野虎雄『沼津兵学校と其人材』(私家版一九三九年八ページ、一九八三年復刻)

- (13) 山下太郎『明治の文明開花のさががけー静岡学園所と沼津兵学校の教授たち』(一九九五年 北樹出版二二ページ)

- (14) 山口昌男『敗者』の精神史』(一九九五年岩波書店五一—二二ページ)

- (15) 山下前掲書二六ページ

史苑(第五七巻二号)

- (16) 矢野 暢『日本の南洋史観』(一九七九年中央公論社五九ページ)

- (17) 山口昌男前掲書五〇七ページ

- (18) 「THE JAPAN WEEKLY MAIL」Nov. 5, 1887, Nov. 19, 1887

- (19) 吉見俊哉『博覧会の政治学』(一九九二年中央公論社一九〇—一九四ページ)

- (20) 「THE JAPAN WEEKLY MAIL」March 11, 1893

- (21) 日章旗掲揚の話がはじめて出るのは、一九一五年(大正四年)だが、ここでは、掲揚したというだけで、翌年回収のために再度渡航したとは語っていない。「独領南洋の今昔」『海外』一九一五年三(二六)一九 回収を含めた形で語られる最初は「外交秘話明治十七年マーシャルに使いしてーヤルト三十二島占領の思ひ出」(一九三六年『南洋群島』二(四)三三—三九ページ)においてである。

(立教大学大学院地理学専攻後期課程)